サポーター寄付のお願い

2月より2016年度サポーターの募集を始めます。

もらう、がんばる

2015年度サポーターのみなさん、ご寄付ありがとうございました。みなさんのおかげで、今年の活動を無事に進められております。3月までをなんとか乗り切ることができそうです。

あらためて2016年度サポーターの募集をさせていただきます。既にお伝えしている通り、現在、我々が劇場にしている体育館の改修工事が進んでいます。耐震補強、屋根と壁の改修が行われて、5月末に終了予定です。一つのNPOが占有して演劇活動をするという前提で、鳥取市、鳥取県が工事をしてくれるということなので、本当に画期的なことです。ただ、一つポイントがあって、行政がやってくれるのは、「体育館」の改修であって「劇場」の改修ではないということです。工事後に引き渡しを受けるのは「体育館」で、それを「劇場」にするのは、我々の仕事です。劇場化のための費用には、最低でも数百万はかかると思われます。色々なところから費用をかき集めるつもりですが、主な財源の一つが、このサポーター制度による寄付です。

これまでサポーターであってくださったみなさん、ぜひ、今年も継続をお願い申し上げます。また、このサポーターの輪を広げることにもお力添えください。それから、**今までサポーターでなかったみなさん**、ぜひ鳥の劇場の活動を応援してください。ファンクラブ的特典は何もありません。が、いただいたお金と気持ちを緊張感をもって受け止め、活動の力にいたします。

さまざまな意味で困難ばかりの我々の社会で、**演劇／劇場を通じての新しい価値の創造と発見**ということを軸に、挑戦と実践を重ねます。どうかどうかご支援ください。

鳥の劇場芸術監督　中島諒人

2014年度は294人の方から726口（3,630,000円）のご支援を賜りました。本当にありがとうございました。
（2015年度は、12月末時点で260人の方から668口のご寄付をいただいています。）

【会　費】　一口:5,000円から。　複数口も歓迎です。
【特　典】　実績報告書の送付、活動報告会（翌年度初め）への参加
【期　間】　2016年4月1日から2017年3月31日まで

サポーター寄付には以下の方法がございます。
入金確認後、会員証をご送付申し上げます。振替手数料はご負担ください。

①郵便局窓口でご入金
郵便局指定の用紙に、お名前、ご住所、お電話番号、お持ちでしたらメールアドレスもご記入ください。
【郵便振替口座　01300-1-58939　名義:特定非営利活動法人鳥の劇場】

②直接現金でご入金
鳥の劇場にてうけたまわります。

③銀行振込、インターネットバンキングでご入金
下記の銀行口座へお振込みください。お名前、電話番号を必ずご入力ください。
【ゆうちょ銀行 139（イチサンキュウ）支店 当座預金 0058939 特定非営利活動法人鳥の劇場】
【みずほ銀行　鳥取支店　普通預金 1718266 特定非営利活動法人鳥の劇場】
【鳥取銀行　本店営業部　普通預金 0269652 特定非営利活動法人鳥の劇場】
【山陰合同銀行　鳥取営業部　普通預金 3894187 特定非営利活動法人鳥の劇場】
【鳥取信用金庫　本店営業部　普通預金 0322825 特定非営利活動法人鳥の劇場】

④企業メセナ協議会の助成認定制度を利用してご入金
企業メセナ協議会の助成認定制度を利用した寄付（税制優遇があります）については、別途資料をお送りしますので、鳥の劇場までお知らせください。

※ご寄付は期間内のいつでもお受けいたします。
サポーターに関するお問合せ
鳥の劇場（担当:中川・高橋）　TEL・FAX:0857-84-3268　E-mail:info@birdtheatre.org

上演をもっと多くの方に楽しんでいただくために

送迎します
JR浜村駅と劇場との間を車で送迎いたします。（無料、要予約）

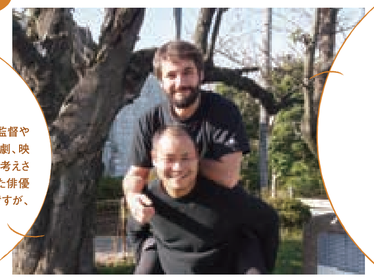
託児します
小さいお子さんをお預かりします。（無料、要予約）

カフェがあります
上演の前後にまる達さんによる淹れたてコーヒーや各種ソフトドリンクなどを販売いたします。

バリアフリーをめざします
障がいのある方にもご覧いただけるよう、適宜対応しております。ご連絡をください。

字幕あります
セリフが聞こえづらい方のために、手に持てる小さい"字幕"をご用意しております。

11月から新メンバーが加わりました！



1990年7月20日生まれB型
野球のポジションはキャッチャー
マイブームは鯖缶
大阪と京都で映画・ドラマの助監督や制作の仕事をしていました。演劇、映画、ドラマなどの垣根無く、人に考えさせるものを作るのが夢です。また俳優としても、まだ卵にも満たないですが、一歩ずつ頑張ります。
山口晃三朗（大阪出身）

1986年7月31日生まれ
マイブームは抹茶
I'm thrilled and honored to come from America to Japan to work with BIRD Theatre! Each morning I see the mist rise off Mount Jubo as my spirit is lifted join to such a talented, dedicated team.
Mitchell CONWAY
（アメリカから日本に来て、鳥の劇場で仕事をすることにわくわくしています。また、とても光栄に思います。毎朝、鷲峰山から霧が降りてくるのを眺めながら、才能にあふれ、献身的に活動する劇団の一員となれたことに、気持ちを高ぶらせています。）
コンウェイ ミッチェル（俳優・アメリカ出身）

しかの、私のおすすめ

「おにゆず」のジャム
「獅子ゆず」とも言われる大きなゆずで、手間ひまかけてつくります。市販されない家庭の味。お湯で割って飲むと体がほっこり温まります。その味は絶品！あなたも是非つくってみてはいかがでしょう？
紹介:村上里美（俳優）

鳥の劇場へのアクセス
鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1　電話：0857-84-3268

■JRを使って
劇場の最寄り駅はJR浜村駅です。※公演日は浜村駅と劇場の間を、車で送迎いたします（無料、要予約）。
□浜村駅まで　・鳥取駅から、山陰本線、米子方面行きで30分
・倉吉駅から、山陰本線、鳥取方面行きで25分
・米子駅から、山陰本線、鳥取方面行きで1時間40分
□浜村駅から　・車で15分

■車を使って
公演日は会場近くに案内看板を設置します。（右図参照）
・鳥取自動車道、鳥取西ICから約30分
・鳥取空港から約30分
・鳥取市中心部から約40分
・倉吉市中心部から約50分
・米子市中心部から約1時間30分

※ご宿泊について
□山紫苑　0857-84-2211 www.sanshien.jp
□お宿夢座　0857-84-2411 www.yumehiko.co.jp
□旅風庵　0857-82-0531 www.ryofuan.com

東京・大阪・神戸・京都・広島・福岡の各都市と鳥取の間で高速バスが運行しています。

□東京
飛行機　約1時間10分（羽田空港–鳥取空港）
JR　約5時間（東京駅–鳥取駅）

□京都
JR　約3時間（京都駅–鳥取駅）
車　約3時間（中国自動車道–鳥取自動車道）

□大阪
JR　約2時間30分（新大阪駅–鳥取駅）
車　約2時間30分（名神高速道路–中国自動車道–鳥取自動車道）

□岡山
JR　約2時間（岡山駅–鳥取駅）
車　約2時間30分（国道53号–鳥取自動車道）

鳥の劇場
2006年1月、演出家・中島諒人を中心に設立。鳥取県鳥取市鹿野町の廃校になった幼稚園・小学校を劇場施設へ手作りリノベーション。収容数200人の"劇場"と80人の"スタジオ"をもつ。劇団の運営する劇場として、「創る」・「招く」・「いっしょにやる」・「試みる」・「考える」の5本柱で年間プログラムを構成。現代劇の創作・上演と併行して、ワークショップ、優れた作品の招聘、レクチャーなどを実施する。
主な作品は、「老貴婦人の訪問」（デュレンマット）、「かもめ」（チェーホフ）、「剣を鍛える話」（魯迅）、「誤解」（カミュ）、「熊野」・「葵上」（三島由紀夫）、「料理昇降機」（ビンター）、「白雪姫」（グリム）、「天使パビロンに来たる」（デュレンマット）など。
2008年から地域や行政との協働による演劇祭「鳥の演劇祭」を実施。国際交流も進めており、韓国、中国、ルーマニア、イギリス、イタリア、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、トルコ、アメリカなどのアーチストが活動。日中韓三国の演劇祭「BeSeTo演劇祭」も開催。舞台芸術家のための創作の拠点として、全国、海外に開かれた場となることを目指す。同時に、演劇・劇場にしかできないやり方での地域振興、教育分野への貢献のあり方を模索している。
2011年度国際交流基金地球市民賞受賞。

芸術監督:中島諒人（なかしままこと）
演出家。鳥取県鳥取市出身。1990年東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2003年利賀演出家コンクールで最優秀演出家賞受賞。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取に劇団の拠点を移し、"鳥の劇場"をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を通じて、一般社会の中に演劇の居場所をつくり、その楽晴らしさ・必要性が広く認識されることを目指す。芸術的価値の追求と普及活動を両輪に、地域振興や教育分野にもかかわる。
公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議理事　鳥取大学非常勤講師 BeSeTo演劇祭国際委員会日本代表 鳥取県教育委員 特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス理事 特定非営利活動法人アートNPOリンク理事　平成21年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞

劇団メンバー
齊藤賴陽・中川玲奈・齊藤啓・赤羽三郎・村上里美・葛岡由衣・武中淳彦・高橋等・中垣直久・生田正・安田茉耶・中島佳子・辻口実里・島巻睦美・山口晃三朗・コンウェイ ミッチェル

劇場の見学は、休日・公演日以外はいつでも可能です。休日が不定期ですので、お越しになる前にお電話でご確認ください。また、稽古見学希望の方は、事前にご相談ください。

特定非営利活動法人鳥の劇場　ウェブサイト www.birdtheatre.org　電子メール info@birdtheatre.org　〒689-0405 鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1　電話・ファックス 0857-84-3268

「鳥の演劇祭8」レポート

2015年9月12日から27日の3週末、毎年恒例の鳥の演劇祭が開催されました。

2015年12月発行

鳥の劇場通信

鳥の劇場は、鳥取県鳥取市鹿野町の廃校になった小学校と幼稚園を劇場に変えて、2006年から演劇活動をしています。鳥の劇場という名は、芸術団体の名前であり、場所の名前でもあります。この時代、日本、鳥取、鹿野町という状況の中で、演劇や劇場の可能性を見つめ、社会に対して我々のできる本質的な貢献は何かを考えながら、劇場での作品制作、上演、県外国外での上演、国際演劇祭の開催、教育活動、学校との連携などを行っています。演劇やアートの力への信頼、コミュニティーの新しい未来をつくりたいという思いでつながった国内外の多くの人たちとのネットワークが、我々の活動を支えています。2016年で活動開始から10周年を迎えます。

鳥の劇場
BIRD Theatre Company TOTTORI

vol.12

鳥の演劇祭は、今回8回目。3週末を中心に、鳥取市鹿野町内の鳥の劇場と仮設会場を合わせて、合計5会場で、タイトル総数17、上演数29の上演を行った。上演の動員数は、約2,400人。鹿野町内には、期間中約17,000人の来訪があった。

2008年から毎年の開催を重ねる中、鳥取という地域の中で、また日本国内的にも意義と特徴のある演劇祭にするべく、回ごとに試行錯誤を繰り返してきた。そもそも演劇祭と呼ばれるものを何のために行うのかという根本的な問いから始まり、集客や広報、接客の工夫まで、非常に幅広い問いと実践の蓄積となっている。

私は、鳥の劇場の活動を小さなベンチャービジネスのようなものだと考えている。資金力の弱いものは、自分たちが持っているユニークな「資源」を見極め、それを元手に小さくても意味のあるビジネスを行い、その実践を基に新しい「資源」を手に入れ、次のビジネスの循環をつくらなければならない。この演劇祭の「資源」は、

・鳥の劇場の普段の活動で得られた劇場運営、事業運営のノウハウ
・地域の人たちや観客との間に醸成した共感や理解
・アーティスト主導の演劇祭であることから生まれる、招聘劇団や外部スタッフとの連帯感
・周辺の自然環境の美しさ
・仮設劇場などとして利用可能な空間が劇場周辺に多いこと

だと認識している。

8回目の今開催については、以下5つが特徴だったと思う。

1 国内外のプロによる上質な舞台作品が観られる。
2 地域の多様な人たち（子ども、大人、障がいのある人）がつくった作品も上演。
3 トークなど関連企画も充実。
4 鹿野町や周辺の秋の自然や歴史を楽しんでもらえる。
5 食べ物やお店もいろいろに楽しめる。

1について
国内だけでなく、韓国、フランス、フィンランド、ニューカレドニア、インドネシアなどから演劇、ダンス、サーカス、人形劇などの作品を招聘した。「敗戦70年。編みなおしたい、私が私であることを、私と世界のつながりを。」という主題のもと、観劇を楽しみながら、歴史や世界との関係について考える機会を提供した。

2について
鳥取聾学校の中高生、じゆう劇場（障がいのある人とない人がともに参加する）、とりっとダンス（劇場周辺地域の方によるコミュニティーダンス）、高校生や小中学生による上演など、演じること踊ることと人との関係を考えさせる多くの作品がそろった。

3について
大潭真幸さん、白井聡さんを迎えて、「戦後」をどう捉えるかということを主題に講演をしていただいた。通常の観客層とは違う人たちに、演劇祭への関心を惹起できた。安全保障関連の法律が成立するタイミングだったこともあり、熱気あふれる時間となった。

4について
演劇祭開催のエリアは、歴史のある地域。上演の合間にのんびりと町歩きを楽しんでもらうこともできる。ガイドの方に案内してもらうミニツアーも行った。

5について
劇場内にカフェやセレクトショップを設けた。コーヒーやカフェのプロに業務を委託することで、質の高い運営となり好評。地域の美しい工芸品などを集めたセレクトショップも年々拡大。また、いんしゅう鹿野まちづくり協議会との連携により、空き家、空き店舗、ガレージなどに多くの店が出店して地域の注目を集めた。集客面で演劇祭との相乗効果が生まれた。

今回は、開催の主題を「敗戦70年。編みなおしたい、私が私であることを、私と世界のつながりを。」とした。戦争の記憶が社会の中で薄まっている。新しい世界秩序の中で安全保障の考えが大きく変化しつつある。社会の発展、経済の成熟の中で、経済的豊かさの達成を人が生きる価値の中心に据える考え方も変化している。社会制度や経済活動で欧米を模範とし、その模倣をすることにも限界がきている。欧米の目線からの評価を期待する在り方、アジアを軽視する考えも転換されなければならない。東京一極集中の問題は言うまでもない。そのような大きな問題意識を踏まえて、この主題とした。

3週間の演劇祭のさまざまな場面を思い浮かべて考える。県内外の多様な観客の笑顔や熱気や涙。自然に生まれる国内外の演者と観客との交流。歴史と自然の中で人と人が出会い、舞台空間や人を通じて、それぞれの文化や歴史や社会の「違い」や「同じ」が垣間見える。ある瞬間の出来事は、もろろんその瞬間につくられる。ただそれぞれの瞬間は、8回の演劇祭の継続の中で蓄積されたものに支えられてもいる。この演劇祭の盛り上がりは、人口最少県鳥取の、しかも中山間地でのささやかな熱にすぎない。が、この場所で今をどう生き、どのように他者や世界とかかわっていくかについて、新しい光と手応えを感じさせてくれる何ものではあった。この何ものかを、少しずつ育て発展させ、名づけ得るものには名前をつけ、名づけ得ないもろいものも網からこぼさず、いずれもを「資源」として、より意味の深い社会的な出来事となるよう育てなければならない。

今年も演劇祭を盛り上げ、支えてくださった観客の皆さん、出演団体の皆さん、スタッフの方々に深く感謝申し上げたい。ありがとうございました。

プログラムディレクター　中島諒人

上演プログラム

海外（フィンランド、イスラエル、インドネシア、韓国、フランス）、国内の、演劇はもちろん、サーカス、人形劇、ダンスなど、多彩で質の高い作品を招聘し、上演しました。

『古事記』鳥の劇場［鳥取］

構成・演出:中島諒人
出演:榊原 毅　齊藤頼陽　中川玲奈　高橋 等　村上里美　葛岡由衣　赤羽三郎　中垣直久　安田茉耶　武中淳彦

日本最古の歴史書「古事記」をもとに、奇想天外な神話世界をコミカルにダイナミックに表現、現代にも語り継がれる物語の魅力に迫りました。最後は、旧日本軍軍人があらわれ、神話と国家の関係を象徴的に描きました。

『LENTO』NUUA［フィンランド］

構成・出演:オッリ・ヴオリネン　ルイス・サルトリ ド ヴァレ

風船を使った2人だけのジャグリングサーカス。物と演者、演者同士の関係から物語を想像させます。技術はもちろんのこと、美しくユーモラスな展開は、観客をおおいに楽しませました。

『みどりにあふれていたころ』～絵本「おおきな木」より

キーシアター［イスラエル］

構成・演出・デザイン・人形操作:ディクラ・カッツ　アヴィ・ズリハ

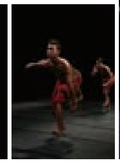
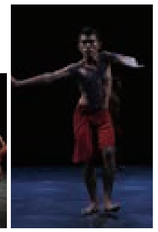
シルヴァスタインの絵本「おおきな木」に着想を得てつくられた台詞のない人形劇。しなやかな人形の動きや装置の工夫が、観る者を架空の世界に引き込みました。大人も子どもも共に楽しめる作品でした。

『Cry Jailolo ～ジャイロロの嘆き～』

エコ・スプリヤント［インドネシア］

振付:エコ・スプリヤント
出演:フェインディ・ダンサ　グレアツィア・ヨベル・ユンガ　フェルナンディト・ワンゲラハ　ゲリー・ゲラルド・ベラ　ノフェルディ・ボンテナン　プディアワン・サプトゥラ・リリン　ゲリ・クリスディアント

インドネシア東部に位置するハルマヘラ島ジャイロロの伝統舞踊をもとに、世界的に活躍する振付家のエコさんが地元の若者とつくった作品。静と動、力強さと軽やかさ。1時間半動きっぱなしのダンサーの熱に、観る側もいっしょに熱くなりました。

『兵士の物語』鳥の劇場［鳥取］

台本原作:C.F.ラミューズ　作曲:イゴール・ストラヴィンスキー
構成・演出:中島諒人　編曲（トランスクリプション）:武中淳彦
出演:中垣直久　中川玲奈　村上里美　演奏:吉川裕之（クラリネット）　武中淳彦（ヴァイオリン・ヴィオラ）　渡邉芳恵（ピアノ）　葛岡由衣（パーカッション）

演奏と朗読、ダンスを組み合わせた作品として上演されることが多いこの物語。この上演では、朗読の部分をお芝居にし、舞台設定も太平洋戦争中の日本、鳥取に置き換えました。約100年前のスイスでの物語が、現在の日本の状況を浮かび上がらせました。

『離陸』サンプル［東京］

作・演出:松井 周　出演:伊藤キム（GERO）　稲継美保　松井 周

2011年に岸田國士戯曲賞を受賞し、演出家・俳優としても活躍する松井周さんが主宰する劇団。夏目漱石の小説「行人」にヒントを得てつくられた3人芝居で、男女の三角関係を軸に、人間の奥深い不気味さをえぐり出す作品でした。

最終日のクロージングパーティーのことが忘れられません。作り手もお客さんも一緒になって楽しめるようなとても楽しい時間でした。恒例となっているらしい一芸大会というものも含まれていて、参加している各カンパニーがそれぞれ何か一つの芸をするというものでした。僕らサンプルでは、僕が一人芝居をしました。練習不足でとても見せられたものではありませんでしたが、僕は『離陸』の本番よりも緊張し、周りにいたメンバーは、披露する前のひどく青ざめた僕の顔に声をかけるのもためらわれたということです。もちろん、始まってしまえばあっという間ですし、温かい雰囲気に包まれているので一人芝居も無事終えることができました。

他の一芸も各カンパニーの特徴がにじみ出ていたし、それを観ているこちら側も自然と能動的に参加できる時間になりました。ああ、そうか。鳥の劇場のみなさんはこういう「場」を作ってきたんだなと羨ましく思ったのを覚えています。作り手と観客の垣根を自然と忘れさせてくれるような「場」で『離陸』の世界初演を行うことができて光栄でした。

さて、これでもう出揃ったかと思っていた頃、じゆう劇場（障がいのある人／ない人の混合劇団）「『ロミオとジュリエット』から生まれたもの」に出演していた女優の方が、劇の一部である『ロミジュリ学園』（東京?にあるロミジュリ学園のロミオとジュリエットが大阪に行って、大阪弁を身につけて帰って来るというオリジナルの物語）を始めたのですが、これが出色の出来で、その後数日間、あのとき一体何が起きていたのかを考えていました。一言で言えば「奇跡」なんですが、稽古を重ねたからこその別バージョンが生まれたとも言うべきものでした。俳優の一挙手一投足と語り手の言葉とのズレが不条理劇のようでありながら、冒険物語というか成長譚でもあるという面白さ。

演劇の理屈で言うならば、虚構／現実、作り手／観客、言葉／身体など、対立項になりうることが完全に溶け合って一つの大きなエネルギーの塊になっているようでした。あの日、あの場所にいた人たちは、先の読めない展開に抱腹絶倒しながら、完全にロミジュリ学園の世界の一部に組み込まれていたように思います。少なくとも僕は完全に持って行かれました。

こんなものが観られるのか!と思うと、どうしてもまた鳥の劇場に、鳥の演劇祭に戻ってこなくてはと考えてしまいます。

他にも鹿野町で食べた料理がほとんど全て美味しかったことや、自分の作品『離陸』についても書きたかったのですが、突出して書きたいことがあったので、こんな感じになりました。

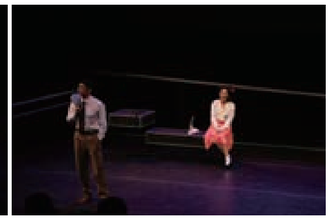
大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

松井 周

『昭和10年、我らが青春』第12言語演劇スタジオ［韓国］

作・演出:ソン・ギウン　出演:イ・ジョンム　ヤン・ドンタク　イ・ファリョン　ムン・ヒョンジョン　ハン・ジョンヨプ

作・演出のソン・ギウンさんは、現在の韓国演劇界の注目株。舞台は日本統治下の京城（ソウル）。実在の小説家パク・テウォンを主人公に、若い芸術家たちの友情や恋愛模様を軽やかな会話で表現。大きな歴史の流れを幕間に字幕で挿入しながら、ミクロの視点から当時を描きました。



『パシフィック・メルティング・ポット』レジーヌ・ショピノ［フランス］

構成・振付:レジーヌ・ショピノ
出演:メレ・ボイトン　古川友紀　ジュンゲン・ナマノ　ジュリー・ナナイ=ウィリアムス　那須 誠　タイ・パイタイ　イレベ・シハゼ　富田大介　エピアッチェ・ワウィン
パーカッション:フランシスコ・エスカランテ=ヴァルガス

フランスで長いキャリアをもつ振付家のレジーヌさんが取り組んでいる、研究と創作のプロジェクト。ダンサーは、ニューカレドニア、ニュージーランド、日本の混合チーム。それぞれの身体が奏でる動きが重なり、大きな音楽のようなうねりを生み出しました。

日本での5週間のレジデンスを経て、9月26日と27日に、私たちは（旧い小学校を劇場とした）「鳥の劇場」の校庭に作られた特設テントで『パシフィック・メルティング・ポット』（PMP）の公演を行いました。
27日は見事な満月で、まさに「魔法がかかった」ような上演となりました。赤い月に加えて、コオロギたちの鳴き声が控えめながらもずっと聞こえ、それは美しい音響として、私たちを取り囲んでくれていました。まるで周りの風景すべてが、私たちを慈ってくれ、観客のみなさんとPMPの体験を分かち合うよう支えてくれているかのようでした。私としては、この上演が今回のツアーの中で最高のものとなりました。一番生き生きしていて、一番しっくりくるものでした。

観客は靴を脱いでそれを袋に入れていました（だから少し寒かったかもしれません）。足や腰を冷やさないよう毛布が配られました。昼間はいい天気でも夜は冷たくなるものです。
終演後には、演劇祭全体のクロージング・パーティが行われ、参加したアーティストみんなが中島さんと鳥の劇場のスタッフの周りに集まりました。それは歓びに満ちたお祝いで、本当に打ち解けたパーティでした。私たちはよく笑いよく喋り、楽しみました。
人間味にあふれ、そして芸術的な、とても素晴らしい思い出をありがとう。

レジーヌ・ショピノ

コミュニティでつくられた作品

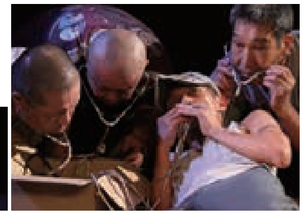
鳥取県内の高校生や小学生、障がいのある方、地元鹿野町に住む方など、さまざまな人によってつくられた演劇やダンスです。外部から振付家や演出家を招聘したり、自分たちだけで新しい作品をつくったり、アプローチの仕方もさまざま。毎年上演数が増え、鳥の演劇祭の魅力の一つとなっています。

コミュニティダンス連続上演①

『新世界ワルツ』新人Hソケリッサ!［東京］

振付・演出:アオキ裕キ　出演:新人Hソケリッサ!

振付家のアオキ裕キさんが、路上生活者に呼びかけて活動を開始したダンスグループ。アオキさんのテーマである「生きることに向き合わざる得ない身体」を目の当たりにする表現でした。



コミュニティダンス連続上演②

『ワタシと 少し違うところにたつ私』とりっとダンス［鳥取］

構成・振付:田中悦子　出演:とりっとダンス

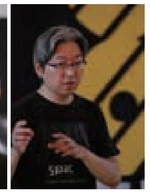
地元・鹿野町に住むメンバーを中心に構成されているダンスグループ。2009年以降、毎年作品を発表しています。今年はテーマや振付けも自分たちで考え、互いの身体、自分の身体に向き合いました。

鳥取大学「演劇創造」受講生によるパフォーマンス

『神様への質問』

指導:大岡 淳（演出家・劇作家・批評家・パフォーマー）
参加者:鳥取大学地域学部地域文化学科芸術文化コース1～3年生

鳥取大学で芸術表現やアートマネジメントを学んでいる学生たちが「演劇創造」という講座の一環として、大岡さんの指導のもと取り組んだ作品。参加者は大岡さんの声に合わせて即興的に身体を動かし、観客も巻き込んだ非日常の世界をつくりあげました。



鳥取聾学校生による上演

『希望の道 ～絆～』

出演:鳥取県立鳥取聾学校中学部・高等部の生徒たち

今年で3回目となる鳥取聾学校生による上演。今回は山本おさむ原作の漫画「遥かなる甲子園」をもとにつくられた物語を演じました。観客にメッセージを届けるために、手話、言葉、そして全身で語る彼らの姿が印象的でした。

『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの』じゆう劇場［鳥取］

原作:W.シェイクスピア　演出:中島諒人、齊藤頼陽　出演:じゆう劇場

じゆう劇場は、障がいのある人とない人がいっしょに作品をつくるグループ。今回は自分の好きなこと、特技、恋愛のことなどを織り交ぜながら作品をつくり、どこにもない世界で一つの「ロミオとジュリエット」ができました。

じゆう劇場公演「「ロミオとジュリエット」から生まれたもの」に参加して

本作品は、四百年も前の、シェイクスピアが原作です。永きに渡って親しまれてきたのは、「悲劇」として、普遍的な価値をもっているからでしょう。

そのような戯曲に、今回、「じゆう劇場」のメンバーと共に、仲間（カンパニー）として参加しました。

稽古は七月下旬からの約二ヶ月間。季節は夏から秋へと移り変わりました。メンバーそれぞれの事情と障がいを抱えての参加でした。

台本と、それを映画化したDVDをもとに、ダンスや歌を通して、メンバー各々がアイデアを出し合い、演出家の指導により、一幕十二場面をつくり上げました。

本作品は、参加者全員の「共同作業」です。創作過程を通じて、創造性、協調性と共に、「他者への眼差し」（思いやり）が育まれたと思います。

何が「生まれた」のかは、観客、出演者、スタッフ、各々だと思いますが、「障がい者もここまで出来るんだ」ということを感じとって頂き、健常者、障がい者、共に社会生活を全うできるような「共生社会」を考える一助になれば、有り難いことだと存じます。

じゆう劇場　三好眞比郎

鳥取市立鹿野小学校6年生有志による詩の朗読

『目と声で伝えよう～私の見つけた戦争の「うた」～』

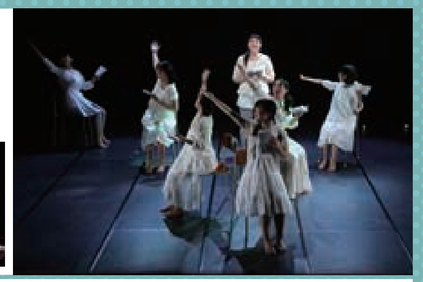
鹿野小学校では、学習の中で朗読に取り組み、全校での朗読会も行っています。今回6年生は、学校を離れ演劇祭カフェを会場に、いつもとは少し違う緊張感の中で発表を行いました。

鳥取の高校生による上演

『Butterflies in my stomach ～YAZUKO ver.2015～』

作・構成・演出:吉田小夏（青☆組）　演出助手:大西玲子（青☆組）
出演:鳥取県立八頭高校演劇部

鳥取県立八頭高校演劇部の生徒たちが、劇団「青☆組」を主宰する劇作家・演出家の吉田さんといっしょに作品をつくりました。ある女性の7歳から77歳までの軌跡を、7人の出演者と7脚の椅子だけで辿る、詩的で美しい舞台でした。



「小鳥の学校」受講生による上演

『宝島』～中間発表～

原作:寺山修司　演出:二口大学　出演:「小鳥の学校」受講生

「小鳥の学校」の小学5年生から中学2年生の受講生が、来年3月の発表公演に向けた中間発表を行いました。昨年に引き続き、二口さんに演出をお願いしました。子どもたちは、個性豊かなキャラクターを堂々と演じ、3月が待ち遠しい発表となりました。

鹿野タイムスリップツアー

『茂子の皆勤賞』

脚本:高橋 等　構成・出演:鳥の劇場

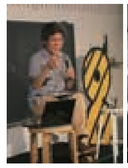
地元鹿野町にお暮らしの80歳代の女性、佐々木茂子さんへの取材をもとに台本をつくりました。一人の女性を通して見えてくる、町のかつての様子や人々のこと。現在の鹿野を歩き、さまざまな場所で芝居を観ながら、昭和という時代に思いを巡らせました。

戦後70年を考えるトークイベント・リーディング上演

戦後70年という節目の年。戦争や歴史について考えることは、「今」そして「これから」を考えるのに重要なテーマです。今回は2人の論客をお招きし、お話をしていただきました。戦争を扱った戯曲のリーディングも行いました。

大澤真幸さんに聞く「戦後の日本人が考えてきたこと」

講師:大澤真幸（社会学者・THINKING「O」主宰）



白井聡さんに聞く「戦後の終わりと現代日本」

講師:白井 聡（京都精華大学人文学部専任講師）

リーディング上演 ～戦後を描く戯曲たち～

『春の枯葉』（1946）作:太宰 治
『雲の涯』（1947）作:田中千禾夫

出演:鳥の劇場

鳥の劇場/鳥の演劇祭に寄せて

かねてから念願だった「鳥の劇場」を9月末に初めて訪れた。特定非営利法人「鳥の劇場」を知ったのは、2011年度の国際交流基金地球市民賞を受賞されたときの紹介ヴィデオであった。廃校となった小学校と幼稚園で演劇創造を行っているユニークな団体で、しかも地域の女性たちがボランティアとして生き生きと活動を支えているというところに魅力を感じた。その後国際舞台芸術ミーティング(TPAM) in横浜のセミナーで、制作の斎藤啓さんの話を聞かせていただいた。そして、ついにSPACふじのくにせかい演劇祭2015で、「鳥の劇場」の代表作『天使バビロンに来たる』を見たことで、その芸術創造の中身にも深く接することができた。

実際に現場に足を運んでみると、いくつかのことに気づかされる。まず、どこの日本の地方にもありそうな懐かしい鹿野町のたたずまいと、どこでも歩いて回れそうな規模、それを十二分に活用している「鳥の劇場」の手作り運営である。次に劇団スタッフやボランティアはもちろんのこと、観客もみな鹿野町、鳥取市、そして鳥取県に深く根差していて、観客層の80%～90%が鳥取県内からという構成は想像以上であった。隣合わせた中年の女性と言葉を交わしたときに「私は中部からです」と言われて、そうかと納得した。若いころ東京で演劇やダンスを見ていた人々が故郷に戻って余裕ができて、舞台芸術を見るという習慣を思い出して楽しんでいるという姿は印象的であった。芸術活動や地域活動を学ぶ若い学生たちと並んで、「鳥の劇場」が掘り起こした大切な受け手であるに違いない。

もう一つこれがおそらく最も大事であるが、すべての運営やプログラムに一本筋が通っていることだ。言い換えると、芸術監督中島諒人さんの視線が隅々に行き届いているということを感じた。今回はソン・ギウン作・演出の「昭和10年、われらが青春」という私たち日本人には状況の理解が難しい作品を見せていただいた。日本統治下のソウルを舞台に1935年1年間に起こった韓国及び世界の社会・政治状況を反映させながら、若手文学者たちの友情や恋愛模様を微視的に描いた作品であり、終演後のトークでは、中島さんは観客たちの理解を助けるように質問し、ソンさんの微妙な表現を引き出してくれた。他方レジーヌ・ショピノの『パシフィック・メルティングポット』は言葉を介さずとも身体で感じることができる作品で、鳥取のみなさんは、太平洋地域から来た音と声の融合を楽しんだことだろう。いずれにしても、大都市で上演することすら躊躇するかもしれない意欲的なプログラムを国際交流の演目に選択する中島さんの挑戦に、敬意を表したい。

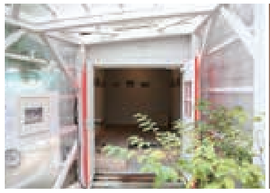
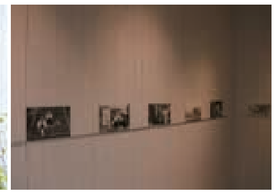
最後に、今回インタビューさせていただいた斎藤さんの話から想起される文化政策上の課題について触れておく。「鳥の劇場」は2006年に劇団として創立され、2010年ごろからは地域の創造拠点としての劇場の運営とそこで行われる演劇祭の企画までその活動範囲が広がり、子供向けの作品創作を始めるなど、みなに受け入れられる地域の劇場としての自覚が生まれたという。2013～14年には、劇場から県内のより大きな枠組みの中へ出ていくという変化が起こり、鳥取県への政策提言を求められるとともに「鳥の演劇祭」が「鳥取藝住祭」の一環としての位置づけを受け、「あいサポート・アートとっとりフェスタ」と名付けた障害者芸術・文化祭へのアウトリーチ活動など、県の文化政策や社会福祉政策との関係が強化されたと聞いた。聞きながら、「鳥の劇場」の存在価値が高まれば高まるほど、県との直接関係が増え、活動的、資金的には有利に働くも、県の地域振興やくらし支援の政策にからめとられて、創作集団としての劇団の一体感が弱まるのではないかとの懸念も抱かされた。やはり、原点としての芸術創造の情熱を失わず、私たち観客を楽しませ続けてもらいたい。なぜなら「鳥の劇場」は、そんな創作普及活動を通して、世界の文化多様性に気づかせることと鹿野町の地域文化に根を下ろすことがバランスよく両立している稀有な例であるのだから。

青山学院大学総合文化政策学部　岡 眞理子

子どもと家族のためのプログラム

写真企画「小鳥の家族」

鳥取県出身の写真家水本俊也さんによる、家族を撮影する写真プロジェクト。撮影と並行して鳥の劇場の「小さなギャラリー」で、これまでの水本さんの作品の展示も行いました。

絵本の「読み聞かせ」

シルバーウィークと重なった演劇祭2週目は、子どもたちもたくさん遊びに来てくれました。鳥の劇場の俳優が「読み聞かせおじさん」に扮して絵本を読みます。聞き入る子どもたちの目は真剣そのものでした。

鹿野を歩く

鹿野ぶらぶら町歩き

協力:ぶらっとしかのガイドの会

城下町の風情あふれる町並みと鹿野の歴史を、町内を歩きながら学び、楽しみます。

鷲峯神社てくてく詣で

協力:田中正人　小鷲河地区公民館

鹿野のシンボル鷲峰山のふもと、石工「川六」さんの狛犬で知られる鷲峯神社を訪ねました。

パーティー

演劇祭恒例の大盛り上がりパーティー。招聘したカンパニーの方はもちろん、演劇祭スタッフや観客のみなさんも一堂に会する交流の場となっています。美味しい料理と飲み物を楽しみながら、歌ったり踊ったりの楽しい時間でした。

演劇祭を楽しんでいただくために

鳥のカフェ

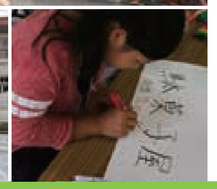
鹿野でコーヒー豆を焙煎されている「まる達さん」がいれる味わい深いコーヒーは、鳥の劇場だけの特別販売。コーヒーに合わせて選んだスイーツも絶品です。食事は、鳥取市内の「café-nee」さんにお願いして、地元食材を使った日替りランチやカレーなどを、種類も豊富にご用意いただきました。

鳥の演劇祭セレクトショップ

演劇祭期間だけ出現する特別なお店です。鳥取でしか出会えない品々をいろいろにそろえています。商品の配置や手づくりの買い物袋など、細部までこだわりまくっています。新デザインの鳥の劇場オリジナルTシャツもたいへん好評でした。

「週末だけのまちのみせ」

鹿野の町中にある空き家や空き店舗に、いくつもの「おみせ」が出店しました。今年は飲食店や雑貨店に加え、作品展示やパフォーマンス、ワークショップなど約60店。週末の鹿野の町は、それぞれに祭を楽しむ人たちでおおいにぎわっていました。



「週末だけのまちのみせ」は2012年から、NPO法人鳥の劇場とNPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会が協力して始まった。きっかけは前年の秋、鳥の演劇祭が終わったころ、演劇祭期間中に鹿野が賑わうような事が出来ないかとの中島代表の言葉だった。

いんしゅう鹿野まちづくり協議会はそれまで鹿野町内において、空き家活用やイベント開催を行っており、更に空き家活用や地域の魅力を高め、移住定住にも結びつけたいと考えていた。また鳥の劇場の活動を地域で応援できないかと話し合っていた。

鳥の劇場としても演劇祭期間中の来訪者をもてなすような企画を望んでおり、両者の思いが一つになって創出した事業である。

1年目は手探り状態で、ルールを決め公募を行い、12店が参加することとなった。期間中の来訪者も予想以上であり、チラシを持ちながらお店を廻る姿に嬉しくなったものである。2年目38店、3年目42店と順調に伸び、来訪者も増加した。チラシのデザインが良く、お店のクオリティーもある程度高く、城下町の空き家などを使い一定期間その時だけのお店が生まれる企画は、新鮮に感じられたのだろう。

本年は59店まで増加した。4年で約5倍となったことになる。過去の出店者にも案内せず、公募だけに頼っているので、出店があるのかいつも不安だ。しかし本年も59店の内、37店が新たに参加したお店であり、それにより新鮮さと期待感が増し、事業の魅力に繋がっていると推察している。

4年開催し事業の課題も見えている。鳥の演劇祭への効果が十分とは言えず、地元の商店が潤っている状況にはない。またマンネリと感じる部分もあり、新たな取り組みや企画を検討する必要があるようにも感じる。

一方で本年は町内の既存店舗も8店が参加し、県外から5店舗の参加があった。地元の店舗が増える事は望んでいた事であり、県外からの来訪者もアンケートで約12%と増加している。また本事業がきっかけとなり鹿野に店舗を構えたケースや、連携をする店舗も生まれ、空き家活用による新たな起業の可能性を生み出している。本事業が少しでも地域に必要とされているとすれば幸いである。

「週末だけのまちのみせ」への来訪者は家族連れが多い。知り合いに会っても笑顔で、あなた達も来ているのっていう感じである。そんな緩やかな感じをこれからも大切にして、新たな「週末だけのまちのみせ」へと成長出来るよう今後も努力していきたい。

NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会　小林 清

こんなこともやりました

□子ども向け小作品の上演やワークショップを行いました

鳥の劇場は活動開始当初から、地域や教育現場の中で、さまざまなアウトリーチ活動を行っています。地域からの依頼による上演やワークショップもあれば、学校の学習発表会の練習をお手伝いすることもあります。地域に劇場がある意味とは何か、現代社会で演劇はどのような役割を果たすべきか。鳥の劇場が活動を続ける中で、いつも考え続けている課題です。

2015年10月·11月に行った上演·ワークショップ
鳥取県文化振興財団「とっとりの芸術宅配便」事業での『どろぼう学校』上演
　琴浦町立聖郷小学校／江府町立江府小学校／
　鳥取市立大正小学校／鳥取市立福部中学校
学習発表会のためのワークショップ
　鳥取市立鹿野小学校／鳥取市立逢坂小学校／鳥取市立鹿野中学校
鳥の劇場近くのお寺、光輪寺で『アナンシと5』·『蜘蛛の糸』上演
浜村児童クラブの子ども会で『アナンシと5』上演
境港市の私立美哉幼稚園で『かちかちやま』上演

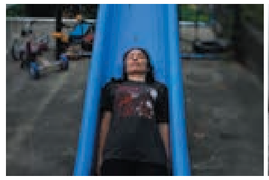
□地元の運動会に参加しました

演劇祭の後片付けもほぼ終わった10月中旬。毎年恒例の地元·鹿野地区の運動会が、劇場に隣接する旧鹿野小学校校庭で開催されました。集落対抗で競技が争われるのですが、鳥の劇場も一つのチームとして加えてもらっています。活動を応援してくださる地元の方への感謝を胸に、メンバー一同、一生懸命走りました。

□写真家池本喜巳さんによる写真プロジェクト

池本さんの一貫したテーマは、「山陰を記録する」こと。鳥の劇場を被写体として、写真によるインスタレーションをつくりたいと、何度も劇場に足をお運びになりました。その中の写真を厳選して「鳥劇人（とりげきびと）2015」という冊子を特別につくってくださいました。目に見えないものを写し出す池本さんの魅力的な写真は、目に見えないものを伝える演劇と通じるものがあります。インスタレーションは、2016年鳥の劇場で公開します。

池本喜巳写真事務所ウェブサイト　http://ikephoto.co.jp



撮影:池本喜巳

□韓国の劇団ティダが共同制作のため鳥取来訪

2015年11月8日（日）～15日（日）

韓国で活動する劇団ティダとは、2010年から交流を深めてきました。日韓の間に横たわる植民地支配の歴史を主題に、舞台作品を共同制作することを目標に、会議や調査、ワークショップを進めています。2015年1月には、鳥の劇場のメンバーが韓国を訪問。今回はティダのメンバー8人が来訪し、鳥取在住の戦争体験者へのインタビュー、広島平和記念公園や資料館の見学などを行いました。痛感したのは、戦争についての認識や感情が、韓国人と日本人の間で大きく異なること。初めは理解し合うことが難しいという声も多かったのですが、リサーチやワークショップ、ミーティングを重ねていくうち、共同して作品をつくる可能性を見出すことができました。引き続き作業を重ね、2016年9月に日本で開催される日中韓の演劇祭BeSeTo演劇祭で発表する予定です。

〈試みるプログラム〉

□新倉健『音の個展Ⅱ』～西風の見たもの～

作曲:新倉 健

2015年10月23日（金）·24日（土）

新倉健さんは、国内外に優れた作品を発信し続ける作曲家。鳥取の音楽界にさまざまなかたちで大きな貢献をしてこられました。鳥の劇場とのコラボにも、積極的に関わっていただいています。本演奏会は、新倉さんの20代から現在までの作品を取り上げました。抽象画のような曲。優しく官能的な曲。誰かが会話をしているような曲。物語を想像させる曲。生の楽器の音色とともに、現代音楽の多様な魅力を体感できる演奏会となりました。

プログラム
1. ゴング·エカサマ·ブダヤ
2. ギーターン:ジャリ
3. Kokopelli
4. 音楽劇「七弦弾きのゴーシュ」より「印度の虎狩」
5. 組曲 HOPIより
　「クラウスの庭」
6. 組曲 HOPIより
　「神話～三つの世界の終わりとツキワカ～」
7. 招待作品 上萬雅洋（新作初演）
　「あいの風（東風）吹くとき」
8. 『魔法のカクテル』プロジェクトI
　～架空のオペラのためのエスキース～

演奏　ピアノ:酒匂 淳
　　横山まさみ
　　渡邉芳恵
　　チェロ:須々木竜紀
　　ハープ:竹村知子
　　オーボエ:松田素子
　　クラリネット:ナーヨン·チャン
　　マーティン·アーベントロート
　　ファゴット:マーティン·ヤーサー
　　パーカッション:福井 蘭
歌唱　ソプラノ:中原美幸
　　テノール:中川正嵩
演劇　鳥の劇場

劇場改修工事の準備を進めています

年明けから始まる劇場の耐震補強と屋根·外壁の改修工事に向けて、劇場の片付けを行いました。劇場内をとにかく空っぽにするため、劇団員総出で運び出しです。音響設備、照明設備、客席、エアコン、パネルなど、専門業者の方にも入っていただき、一気の作業となりました。9年間少しずつ劇場化を行い、いろいろな人がさまざまな作品を上演してきた場所は、現在、もとの旧鹿野小学校体育館に戻っています。感慨深い気持ちと新しい劇場への期待感とが入り交じります。工事は2016年5月末に終了、7月に新劇場お披露目の予定です。

【劇場改修工事の間も鳥の劇場は活動します】

＜創るプログラム＞

鳥取県内巡回公演『白雪姫』～グリム童話「白雪姫」より

構成·演出:中島諒人　出演:鳥の劇場

2016年1月16日（土）·17日（日）東部公演（鳥取市文化ホール）
2016年2月13日（土）·14日（日）中部公演（カウベルホール/琴浦町）
2016年2月27日（土）·28日（日）西部公演（米子市淀江文化センター「さなめホール」）

※本作品は東京で開催される鳥取県への移住定住を提案するイベントでも上演します。
2016年1月23日（土）·24日（日）
東京公演（東京芸術劇場シアターウエスト）

西大寺子ども劇場30周年記念特別公演

『すてきな三にんぐみ』西大寺公演

（百花プラザ多目的ホール/岡山市西大寺）

原作:ミミ·アングラー　構成·演出:中島諒人　出演:鳥の劇場

2016年3月13日（日）

＜いっしょにやるプログラム＞

小鳥の学校 発表公演『宝島』

原作:寺山修司　出演:小鳥の学校 受講生

2016年3月26日（土）·27日（日）